が、惜しくも入賞を逃した。決勝射詰め第一矢の的中者が一名のみであっただけに、誠に惜しまれる内容であった。
本大会は、大成功の評価を得て終了したが、県弓連会員一丸となっての取り組みに県選手の健闘が花を添えた大会だった。

二　希　望

かつて、中学校の教師をした経験があるとはいえ、二十数年以上も前のことである。大人である学生を指導してきたこれまでとは勝手が違った。驚くと同時に、ほほえましい場面に度々遭遇した。
入学式で早めに入場した上級生が待っているときのことである。拍手とともに一年生が入場してきた。校長式辞は始まって間もなかったからであろうか、当初はなんとか私の方を向いて聞いてくれた。しかし、姿勢が次第にくずれ、頭や体が動きだした。なかには、鼻歌こそ歌わないが完全に自分の世界に入っている者もいる。
後で教官に聞くと、「今日はお行儀がよかった方です。一昨年は式辞の途中で校長先生を指さ

して、『僕、あのおじさん知ってる』と大声で叫んだ子がいましたよ」と言っていた。

式が終わって、入学記念写真の撮影がこれまた大変だった。一人を注意すればもう一人が動く。皆が座っているのに急に立ちあがって歩き出す。写真屋さんは、大奮闘である。それでも見事に写真を撮り終えた。写真屋さんにはもう一つの腕が要ることを教えられた。

しかし、子どもの発達と教育の力は凄い。次の年、二年生になったこの子たちが、入学式で一年生を迎えたが、別人であった。お行儀良く待ち、「一年生には困ったものね」といわんばかりに余裕をもって見守っていた。

学校にはそれぞれ学校目標があり、正門や玄関など、目立つところに掲げてある。私が過ごした小学校や中学校にも当然あった。しかし、それがどんな内容であったのかまでは覚えていない。高校にもあったはずであるが、まるで記憶にない。多くの人が私と同じ状態ではないだろうか。

附属山口小学校の学校目標は、「かしこく」、「やさしく」、「たくましく」であり、教育は常にこれを原点として行われていた。この学校目標は教師にも児童にも受け入れられていた。また、保護者にも浸透していた。私もとても好きだった。今でも素晴らしい学校目標だと思っている。

「かしこく」、「やさしく」、「たくましく」の内容は「知」、「情」、「意」のバランスのとれた人

間像と、知育、徳育、体育の必要性が示唆されている。

附属山口小学校の創立は明治七年である。全国でも確か、三番目に古く伝統のある学校であるが、この学校目標は古くから変わることなく愛され続けてきた。内容があるだけでなく、分かりやすく、口調がよく、親しみやすいからであろう。

平成八年の「中央教育審議会第一次答申」以来、「生きる力」を育むことが現代教育の重要な方針となり、その内容は、「①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する力　②自ら律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性　③たくましく生きるための健康や体力」として示された。

「生きる力」の中身は、まさに「かしこく」、「やさしく」、「たくましく」生きることである。この学校目標は、時代の変遷に堪え得る小学校教育の不易を表現している。私はこの学校目標に沿って、朝礼や、他の場で講話をした。

《今日の新聞に『いじめ』のことが出て（載って）いました。でも附属小学校の皆さんは『いじめ』なんかしませんね。だって、「かしこく」、「やさしく」、「たくましい」附属の子どもですから（シーンとなる）……》

《かしこい子どもは、いじめをしてはいけないことを知っているし、どんなことがいじめかも知っているでしょう。やさしい子どもは、いじめられている子どもがどんなにつらいか、悲しいか、いじめられている子どもの気持ちがよくわかりますね。たくましい子どもは、いじめたくなっても我慢するし、いじめている人にそんなことをしてはいけないという勇気を持っていますね。だから、校長先生は、新聞を見ても、附属小学校では『いじめ』はないと安心しているのです。……》

どこの学校の子どもも「子どもは子ども」、どれだけ実行してくれるかはわからないが、あどけない瞳で真剣に聞いてくれていた。

毎年五月に入ると、全日本弓道大会と定期中央審査会が行われる。この頃になると、京都の御所や岡崎の武道センター近辺は、袴姿の人や弓を持った人が行き交い、古都京都にふさわしい風景となる。平成七年五月も同様であった。四日〜六日の間、錬士、教士、六段、七段、八段の審査が京都濟寧館弓道場と武道センターにおいて行われ、全国各地から千四百九十九人の受審者が集まった。私もその一人であり、武道センターで教士の部の審査を受審した。

附属の校長になって従来とは違った忙しさを体験していたが、時間が許す限り道場には通い、

練習していた。さらに、県弓道連盟の副会長といった立場から、中国地区レベルの講習会を受ける機会が増大した。その結果、わずかではあるが進歩を実感し、「教士」合格の時が近づいていると思うようになっていた。

審査が近づくにつれて、「ここで必ず教士になる」と自分に言い聞かせ、これまでの失敗を反省し、練習していた。平成三年に六段に昇段してから年二回は教士審査を受審していたが、せっかく、甲矢（一本目）はまずまずの射が出ても乙矢（二本目）で失敗することが多かった。それも、会が短くなって失敗していた。そこで、今回の受審にあたっては、乙矢は甲矢よりも我慢するという目標をもって練習をした。

一次審査は、ある程度の会があり、鋭い矢が飛んで束中した。手応えはあったが、何しろ三百五十六人が受審しており、例年、一次審査合格者は良くても一割程度である。どうなるか分からない。やるだけのことはやった。後は天に任せる、という気持ちで発表を待った。

合格していた。二次審査は、一つ的射礼であった。一つの的を四人で順番どおり、約束ごとに従って、すきのない体配でやり遂げなければならない。さらに的中しないと合格することはまずない。

入場から退場までやるべきことを確実にやるという気持ちで臨んだ。甲矢が一時のところに外

れ、追い詰められた。しかし、「乙矢は甲矢よりも我慢する」これだけはやり遂げようと思って必死に我慢した。その結果、的中した。失敗をしたわけではなかったが、二次審査で一中だからどういう結果になるか分からないなと思って発表を待った。

合格しており、教士の候補に残った。後日、「射品・射格」という課題についての論文を提出し、しばらくして合格通知を受け取った。しばし、希望に胸が膨らんだが、とにかく厳しい道のりだった。

合格者は十六名。四・五％の合格率であったが、決して低過ぎるほどではなかった。京都定期中央審査を受審するために集まった千四百九十九人のうち、錬士、教士、六段、七段、八段に合格し希望が叶えられた者はわずか四十五人、実に三％にすぎなかった。

平成七年度全国高等学校総合体育大会が鳥取県を主会場として、中国五県で開催された。弓道競技は、山口県の引き受けとなり、山口県弓道場で行われた。

私は山口県弓道連盟副会長として、十五名いる大会副会長の末席に名を連ねた。平成六年に同じ道場で行われた「第一回全日本弓道遠的選手権大会」の時のように直接運営に関わるのではなく、側面もしくは後方支援の立場であったので、ゆとりがあり、高校弓道を知るよい機会となった。当時の全国高体連弓道専門部長の須田三郎先生や現専門部長の横山英記先生、国体や全日本

弓道選手権大会の会場で顔を合わせる渡辺鉄哉先生と親しくお話ができ、高校弓道への理解が一層深まった。

その大会の折、練習会場として提供した「山口大学弓道場」で、一人の選手に目を奪われた。射技、体配ともに素晴らしく、特に深い会から生まれる鋭い離れと大きい残身が見事だった。確か福島県の選手だったと思う。個人戦に出場していたので注目して見た。予選一次は四射四中したが、準決勝戦では四射三中で、決勝進出を逸していた。練習のときほどの伸び伸びした射でなかったのが残念であった。しかし、この選手を通して、高校弓道とこの大会が一層さわやかなイメージとして私の目に映った。当時、私は、高校弓道に失望し、批判的であったが、希望を見出せる体験だった。

そのような時期、日本体育学会から論文審査委員の委嘱を受けた。機関誌に投稿される学術論文を審査するのである。自分が手がけている研究の範囲にとどまらず、体育心理学全般の論文を審査しなければならない。審査対象の論文だけでなく、引用している論文やその他の関連論文も読まなければならない。なかなか時間がかかる。

審査委員は三人いて、同一の論文を読み、それについてＡ・Ｂ・Ｃの三段階で判定するのであ

る。Ａであれば掲載可の意味であり、三人の評価が一致すれば即掲載である。Ｃであれば掲載不可である。Ｂであれば条件つき掲載可の意味で、審査員の指摘する箇所を訂正して提出し、再審査を受けなければならない。

全員の意見が一致するか、二名がＡまたはＣと判定するまでこれを繰り返すので、結構時間がかかる。論文を書いた人を大事に扱うと同時に、学会誌の権威を落とすことのないよう適正に審査しなければならないので、責任は重い。

論文のテーマや引用文献を見れば、執筆者もしくはその指導者の見当がつく。よく知っている人のものであれば、掲載可としたいのは人情である。しかし、それをすることはできない。Ｂをつけ、条件つき掲載可であればまだよいが、Ｃをつけ掲載不可と判定せざるを得ないときは心が痛む。こんなときは、因果なことを引き受けたものだと後悔する。

しかし、勉強にはなる。附属校の校長という自分の研究がしにくい状況であるだけに、こうした機会は研究を意識するよい機会であり、つらいけれども希望を繋ぐことができた。